

渉成園の育成管理 — 日に渉り時代の心をはぐくむ「真宗式」庭園 —

Fostering of Shōsei-en Garden: fostering the spirit of the age at a Jōdo Shinshū Buddhist Garden

鷲田 悟志* 太田 陽介* 加藤 友規* **

Satoshi WASHIDA* Yosuke OTA* Tomoki KATO* **

Abstract: Located in Kyoto City's Ukyo Ward, Shōsei-en Garden is a nationally designated Place of Scenic Beauty that belongs to the precincts of Higashi Honganji Temple. Its management thus far has been based on the garden's history, but because it is an urban green space, we have redesigned our management concept by focusing on the value it has as an ecological refugia. Specifically, we are striving to recreate the scenery of the natural habitats of elements such as black pines and Japanese maples. We look upon the ongoings of the garden's plants and animals and the Buddhist concept of "life, aging, illness and death" as forms of Jōdo Shinshū Buddhism's teaching of "co-resonant life" making up part of the garden's scenery. To give the future a garden that is even more alluring, we continue to balance "permanence and fashionability" as an effort toward passing down cultural properties to later generations.

Keywords: Japanese garden, refugia, Place of Scenic Beauty, Jōdo Shinshū Buddhism, garden management

キーワード: 日本庭園, 文化財庭園, リフュージア, 名勝, 庭園育成管理

1. はじめに

文化財に指定された庭園の保全において、日常的な育成管理業務は非常に重要である。日本庭園は常時変化にさらされており、庭園を構成する石造品や石組み、地形や排水等設備に経年変化・劣化がみられるため定期的な管理を必要とする。さらに庭園の所有者の変更や庭園を利用したイベントの対応などによる偶発的な変化、そして台風等の災害時など突発的な対応を迫られる場合も生じる。

中でも短期間で著しく変化する庭園の植栽に関しては、日常的な育成管理が不可欠である。下草、低木や樹木類への手入れが行き届かない場合、直ちに景観に大きな影響を及ぼすことになる。例えばクロマツ (*Pinus thunbergii*) は日本庭園に多く見られる樹木であるが、一度「芽摘み」の作業を行わないだけでも樹形に乱れが生じ、単年では修正の難しい事態に陥る。また近年の気候変動による夏期の猛暑や侵略的外来種の繁殖拡大等への対応も求められる。日々の注意深い観察と地道で堅実な作業の積み重ねの結果、ようやく安定した美しい庭園の景色を維持することができるといえる。

日常的な庭園内の作業の他に、刻々と変化する社会状況への対応も欠かせない。文化財保護法の改正(平成31年・2019)を受け、文化財庭園においても文化財の「保存」に加え「活用」にも積極的な取り組みが求められている。同時に都市開発による庭園外の周辺環境の変化についても対応が必要である。高層ビルの建設などは庭園の借景にとって著しい影響を及ぼす可能性が生じるからである。

さらに昨今は少子高齢化による労働人口の減少が予想されており、日々の庭園育成管理業務に携わる職人の不足や「文化財庭園保存技術」の担い手の不足が懸念される。後進育成には特に力を入れて取り組まない限り、技術の継承や「手間暇をかけた仕事」の継続が容易に進まない状況にある¹⁾。

「今まで通り」の知識や考え方で「例年通り」の作業を継続するだけでは、庭園の現状維持さえ難しい。庭園を管理する立場にあるものは、庭園を未来へ受け継ぐために、時代に応じた管理のあり方を総合的に検討した上で方針を選択し実施する必要がある。

本稿では昭和47年(1972)より約50年間にわたり育成管理に

携わってきた国の名勝「渉成園」における近年の実践の内容を報告する。

2. 渉成園概要

渉成園は真宗本廟(東本願寺)の飛地境内地として、通称「枳殻邸」の名で知られる。真宗本廟(東本願寺)の東方約200m、京都駅から徒歩10分圏内に立地し、面積は約35,200㎡(約10,600坪)である。慶長7年(1602)に徳川家康から寄進された地に東

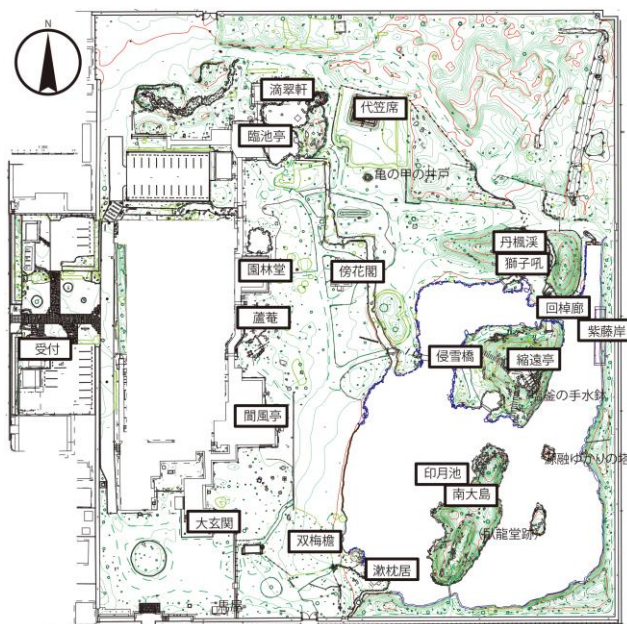


図-1 平面図に庭園の重要な構成要素を加筆

*植彌加藤造園株式会社 ** 京都芸術大学大学院

*Ueyakato Landscape Co., Ltd.

** Kyoto University of the Arts

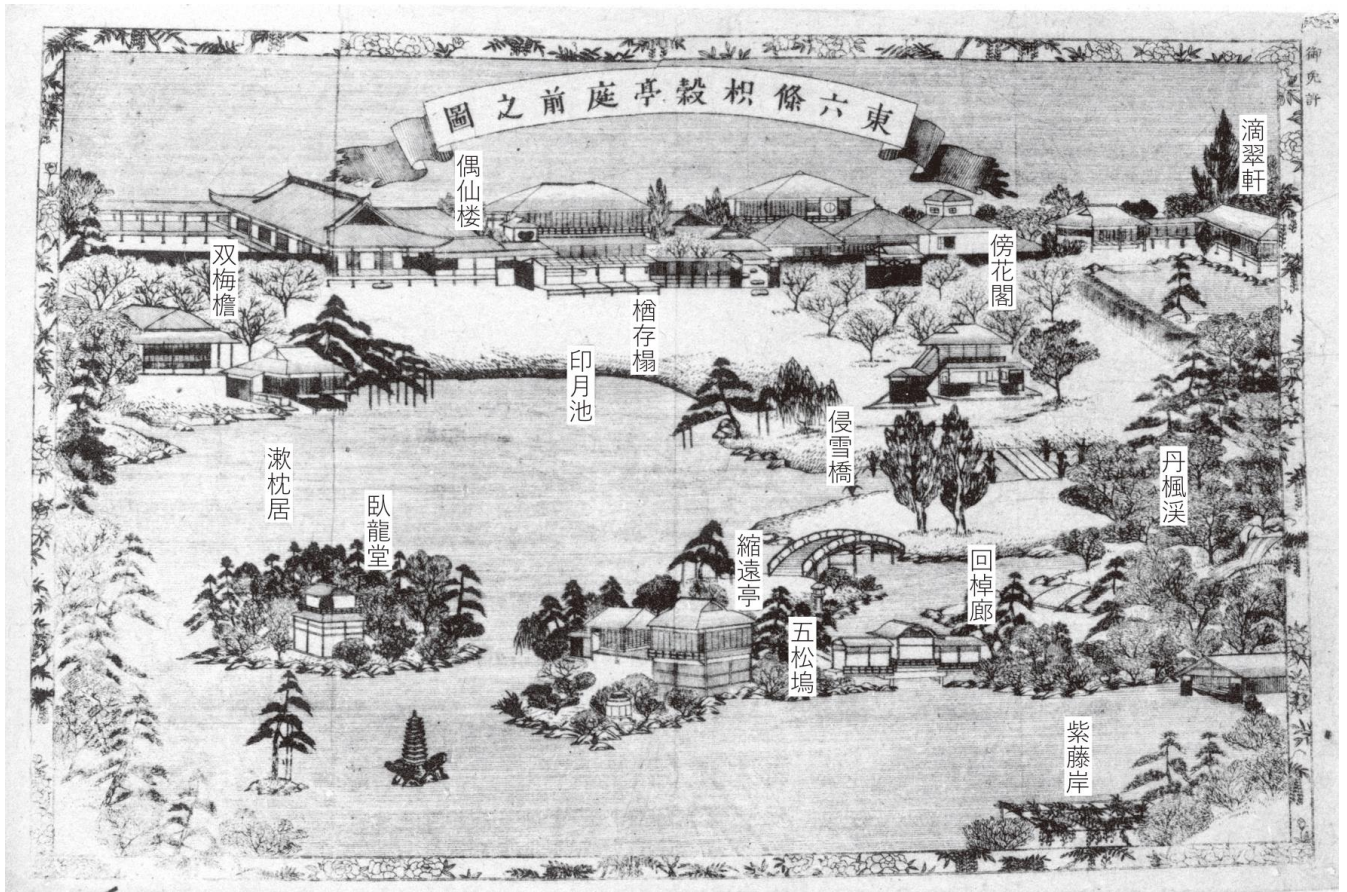


図-2 『東六条枳殻亭庭前之図』(明治期に描かれた石版画)に「渉成園十三景」と檀存榻の名称を加筆

本願寺が造営された後、寛永18年(1641)にその東方の地が徳川家光により寄進され、ここを第十三代宣如上人が隠棲の地として整備したのが渉成園の始まりとされる。以後、渉成園は歴代宗主が移り住んだため、隠居屋敷とも呼ばれた²⁾。

渉成園内の建物は、「安政の大火」(安政5年・1858)と「蛤御門の変」(元治元年・1864)によってすべて焼失し、現在のものは明治以降の再建である。昭和11年(1936)12月16日、国の名勝に指定された。

現在、渉成園は年中無休で一般に公開されている。以前は東本願寺参拝接待所に観覧申込受付があり、主にそのことを知る門徒を対象に公開されていた。平成8年(1996)に西門に専用受付が設置されて一般公開が開始されて以来、年々来園者が増加傾向にある。

3. 育成管理の基本計画

江戸時代の渉成園には、敷地西側建築群の住まいとしての利用形態を基本としながらも、敷地東側の庭園を迎賓施設として利用する形態を併せ持つ空間的特質があった³⁾。

また幾度かの火災を経て、明治、大正、昭和に至るまでエリアごとにパッチワークのように改修、変化が施された庭でもある。一般公開から28年が経過し、来園者が増えたことで園路を中心に劣化が進み、継続的な管理と整備が必要になってきている。復原に際しても、過去のどの時代に焦点を合わせるかに応じて施工方針が異なるため、その都度学術的な審査を経て保存修理、環境整備事業が進められてきた。

また近年は、京都駅前という都市的立地環境における「グリーンインフラ」として、生き物達にとって限られた貴重な生息地としての重要性が見いだされ、育成管理の意義も高まりつつある。

「庭の声」に耳を澄まし、様々な要件に対して適切な方針を計画するのが育成管理の実務の一つである⁴⁾が、令和5年(2023)度現在、特に育成管理の計画に際し留意している主要な観点を以下の3つに整理した。

(1) 文化財庭園

渉成園は国の名勝に指定された庭園として、歴史的背景や文化、水源などインフラの変化が学術的に研究されてきた⁵⁾。

「渉成園」という名前は、中国の詩人陶淵明の『帰去来辞』の一節「園日涉而以成趣(園、日に涉って以て趣を成す)」から採って名付けられた⁶⁾。ここには宣如上人が創設当初描いた庭園像が表現されており育成管理の中心的コンセプトとして重要であると考えられる。

池、遣水、茶室、降り井など、庭園内随所に文人好みの建築や景物が設えられており、中でも特に、文政10年(1827)に頼山陽(1781-1832)が撰した『渉成園記』で称えられた庭園内の十三の景物である「渉成園十三景」は、渉成園の文化財庭園としての本質的価値に位置付けられる⁷⁾。

(2) 「真宗式」庭園

渉成園の地割は「園林堂」(図-1中央)とその山門にあたる「傍花閣」を結ぶ中軸線を基準に作庭がなされている⁸⁾。これは園林堂に安置されている御本尊(阿彌陀仏)を中心とした真宗門徒の生活規範が庭園にも反映されているものといえる。作庭当初から「真宗の庭であること」がこの庭園の根底に響いている。この「法をつなぐ」という使命を受け取り、育成管理にも反映させる必要がある。

庭園中心部に100年以上前に枯死したビャクシン(*Juniperus*)が2本存在し、シンボルツリーのように残されている。樹脂の豊富な針葉樹の硬質な幹肌には、年月を経て彫刻のように深い皺が刻まれており、迫力ある姿は来園者の鑑賞に堪える。この枯れ木を

現在まで伐採・撤去しないでいた先人の判断は、涉成園に真宗の教えが連綿と受け継がれてきた結果だといえる。老病死もまた命の理であり必然で、忌避すべき存在ではないとの教えである。育成管理のコンセプトを構築するうえで極めて重要な要素である。

平成10年(1998)の蓮如上人500回御遠忌に際しては、「バラバラでいっしょ～差異(ちがひ)をみとめる世界の発見～」がスローガンであった。そのビジュアルイメージとして掲示物などには、涉成園の西門入って正面にあり多種多様な石を組み合わせ造成された「高石垣」の写真が使用されていた。涉成園には門徒以外にも、国内観光客に加え、海外からも人種も国籍も様々な人々が訪れており年々増加傾向にある。植物、昆虫、鳥、水生生物、ヒト、移ろいゆく周辺環境など、多様な要素を受け入れる「真宗式」の庭園として「響きあう命」を大切にす真宗の教えを育成管理の指針の基礎に据えている。

(3) レフュージア(Refugia・避難地)としての庭園

先述のとおり、涉成園は京都の玄関口である京都駅から徒歩10分圏内に立地している。令和5年(2023)には京都市立芸術大学が移転し、今なお新しくホテルが建設され、途切れず開発が進行している商業・観光・文化的に重要な場所である。

京都駅周辺は都市部であり鴨川の河原から涉成園と東本願寺を除くと西本願寺境内と梅小路公園付近まで緑地といえる環境は極めて乏しい。その中で涉成園は高木、中低木や竹を含む樹木群が存在する。木陰、草地、水辺を備え、四季を通じて植物、水生生物、鳥、昆虫など周辺エリアと比較すると多様な生物種が生息しており、凶らずしもレフュージア(避難地)としての機能を果たしていると考えている。

都市部において人と自然が触れあえる環境は貴重である。涉成園は観光客、家族連れ、近隣の保育施設の子ども達も多く訪れており、「公園的」な性格を持った開かれた庭園である。そこで近年は安心と安全に配慮し除草剤、殺虫剤の使用を避け、できる限り自然生態系を活用した管理を心がけている。『京都府レッドデータブック2015』(京都府自然環境保全課/編)に掲載されている絶滅危惧種のコガマ(*Typha orientalis*)や絶滅寸前種であるミズアオイ(*Monochoria korsakowii* Regel et Maack)など希少な生き物も確認されている⁹⁾。

都市部において少なからず緑地の環境を担保することができている庭園として、後藤¹⁰⁾らは生物多様性の保全に関する調査を定期的に行い記録している。

4. エリア毎の管理方針

育成管理に関しては、職場の先人の指針にエリア毎の管理方針が提案されており¹¹⁾、現在も基本的な部分はそれを踏襲する形で実施している。

その上で近年の「真宗式」庭園としての側面と都市部グリーンインフラの側面を育成管理の重要な立脚点として整理し、基本方針を再検討した。

以下、特に重要なエリアについて具体的に管理方針を記す。

(1) 全域

剪定等植栽の管理に関しては全域において基本的に「柔らかく」調子を整えている。先述のとおり、かつては歴代宗主の「隠居屋敷」でもあり、リラックスできる、心落ち着く空間であることを優先している。建築群に近い庭園西側から東側エリアに向けては、遠近のメリハリを意識し、同時に全体の統一感を損なわないよう連続的な変化を施している。

1) 近年の暑さへの対策: 涉成園は直射日光にさらされるエリアが多い。近年の夏場の強い日差しと過激な気温上昇による乾燥等、樹木のダメージを防ぐため、剪定時に葉量や枝量を減らし過ぎないように管理している。年々変化する気象環境条件を考慮しな

い「例年通り、今まで通り」の仕事では、枝を多く切り過ぎる可能性があり、その場合大量の幹吹き枝や徒長枝を発生させ、結果として樹形を損なう恐れが強い。特に春から夏期の強剪定は、樹形を乱れさせてしまい、樹勢を著しく損なう可能性がある。そのため強剪定に関しては、建築等の文化財保護の観点からやむを得ない事情がある場合においても関係者と十分な協議を経た上で実施することになっている。

2) サイズダウン: 涉成園は年間通じて一般公開されており、恒常的に人の目にさらされている庭園である。急激に景色を変えてしまうような、大幅な切り下げを避け、柔らかい自然な枝ぶりや安定した樹形を維持したまま、枝を差し替える剪定の技術によって、計画的且つ段階的なサイズダウンを行っている。

3) 高木について: 高木の作り出す濃い木陰は夏場でも過ごしやすく、その木漏れ陽は来園者に心地よい安らぎをもたらしてくれる。近年大型化する台風への被害対策として、庭園内の高木は切り下げや伐採の対象になることが多い。その半面、高木のもたらす木陰は近年の気候変動による夏時期の厳しい暑さを和らげる効果を持つ。都心部にありながら広い緑地面積を有する本庭園においては、適切な技術に基づき安全に高木を保護する必要がある。

涉成園ではその広さにもかかわらず順路に休憩のための施設が設置されているわけではない。入口から順路通りに回廊や縮亭まで周遊するだけでも距離としては600m~700m程、時間も30分以上を要する。園内は平坦で開けた地形が多いため特に夏時期は来園者への直射日光が厳しい。そのため高木の木陰の与えてくれる心地よさは貴重であり、そのことを考慮した上で適切に管理を行っている。

4) 遮蔽性について: 広い庭であるが作庭時からエリアごとにゾーニングされており、それぞれのエリアにストーリー性を伴った趣向が凝らされている。庭園の全域が一カ所の視点場から見通されてしまい園内の散策が冗長で退屈なものにならないよう、植栽によってエリア毎の見通しを意図的に遮ることも重要である。遮蔽する際は、陽光の輝きや風を感じられる「透かし剪定」を施し、圧迫感のない空間を保つよう配慮している。

5) 地形の保全: 南大島や北大島には地崩れが懸念される程の急峻な地形が多い。ここでは低木類が数多く見られるが、強引な間引きや除伐を行わず、樹木の根茎による地形保護を行っている。

6) 「花、実、枝もの」の鑑賞価値: 園内にはクチナシ(*Gardenia jasminoides*)の中低木が数多くみられる。実の色やユニークな形も鑑賞できるため、花後の刈込を行わず枝を更新する剪定を施す。冬時期の庭園の彩りとして、あるいは鳥の食料としても貴重な種である。

(2) 双梅檐

双梅檐は御風呂舎跡の傍らにあり、もてなしの宴のスタート地点に構えられている。この位置取りにより、初めての訪問者に庭の全貌を明かさないうための「目隠し」の衝立のような機能を担う。また、この配置はいち早く開花し春を告げるウメという樹木に、これから始まる饗宴の「予兆」を匂わせ「予感」させる機能を象徴的に担わせた演出だとも考え得る。風にそよぐ枝の優美さと柔らかさを大切に剪定を施しているが、令和4年(2022)の土壌改良工事と植えなおしを行ったため、現在は複数年かけて樹形を整えていく過程にある。

(3) 印月池、南大島エリア

芝生広場からの眺望はこの庭園の主景となる。閨風亭前の沓脱石から、広々として開放的な芝生広場、印月池、南大島、塔の島、外周の高木の樹冠、阿弥陀ヶ峰、清水山へと至る軸線を広々と見通すことができる。季節ごとに、様々な表情が楽しめるよう管理している。

1) 「遠さ」の演出: 涉成園の立地はその成立以前は豊臣秀吉が

天正 19 年 (1591) に築いた「御土居」のラインに重なっていた¹²⁾。このことはつまり京の都の洛中洛外の境界に位置していたことを意味する。「塩釜」や「松林」などの景物は「海」を想起させる。辺境との境界線に立ち、対岸との心理的距離が引き伸ばされることにより、敷地以上に大きなスケール感を感じられる。

かつて漱枕居から縮遠亭のある北大島まで舟で渡ることによって印月池に茶庭の「露地」的な機能を担わせたような、趣向を凝らしたおもてなしの宴が催されていた。実際に舟の上から眺めると、南大島、松の島、紫藤岸、漱枕居も舟旅の景として新たな表情を見せる。この「小さな舟旅」の趣をさらに強化するためにも、向こう岸が遠く感じられることは重要である。印月池の水面に対峙する時、此岸・洛中から彼岸・洛外を感じられる遠方への旅路、「遠さ」の演出を重要視して管理している。

2) 秋時期：10 月から 11 月にかけて東本願寺の報恩講までの期間は、来園者が最も増加する。この時期に庭園外縁部から徐々に草刈りををはじめ、最後の南大島以外の下草を刈り取る。このことにより庭園中の秋の虫が追い込まれた南大島からのみ、虫の音が響く「秋のサウンドスケープ」を創出する。

3) 冬時期：園内のススキは年末にすべて刈り取り、南大島にのみ白く揺れる冬枯れのススキ群を残す(写真-1)。冬の景にいろどり動きを添え、南大島北側の山水画の中の仙郷のようなごつごつした石組み群とのコントラストを際立たせる。

4) 春時期：下草類をすべて刈り取り、春の草花と萌える新緑を鑑賞できるよう整える。

6) 夏時期：春から生じた草が生い茂り、適宜間引き選別的除去を行い視覚的にメリハリのある景色を整える。

(4) 松林

印月池の岸辺のクロマツ林エリアでは、年明けにかけての手入



写真-1 冬のススキを活かした南大島の景 (2024 年 1 月撮影)



写真-2 「敷松葉」の景 (2024 年 1 月撮影)

れに伴い「敷松葉」を行う。従来「敷松葉」は、マツの手入れ「葉むしり」の際の松葉を霜などで苔が痛まないよう敷き詰めるといふ茶庭や露地に見られる冬の設えである(写真-2)。

この松林の「敷松葉」には二つの意味がある。

ひとつは景色作りである。クロマツ林と松葉の関係は、しばしば海岸線に見られる風景であり、松林も海岸の自然風景を見立てている。冬時期の低く射し込む冬の陽光が、クチクラ層豊富な敷松葉の広がり反射し、まばゆいほどに輝き、印月池の水面の反射と合わせ園路は輝きに包まれる。松林の北面には、秋頃に刈り取り、くるぶし丈まで伸びなおしたチガヤが紅葉しており、色の対比が味わえる。

もうひとつの意味としては、下草の抑制とバクテリアコントロールがある。敷き詰められた松葉の有機酸による土壌の弱酸性化によりクロマツの樹勢への好影響を期待している。これにより近年は松林の下草の植生が草地から苔地へと変化してきている。

(5) 傍花閣

自生する野花を活用した景色づくりを行っている。

涉成園の名前の由来となる陶淵明『帰去来辞』にある庭園のコンセプトに則り、帰るべき場所、心安らぐ場所、郷愁を誘う田園風景のイメージを創出している。

早春には、柔らかい印象のイネ科の植物の中に野草であるムラサキサギゴケ (*Mazus miquelii*) やニガナ (*Ixeridium dentatum*) が開花して、モンシロチョウ (*Pieris rapae*) など送粉者呼び寄せ。6 月頃には、ブタナ (*Hypochaeris radicata*) が黄色い花と白い綿毛が帯に広がり野原の景色を生み出す。トンボや蝶が飛ぶ里山のような野趣あふれる情景である。季節折々に表情を変える野花が風に揺れる。野暮な印象を与えないよう適宜園路際を刈込むなど調整を行っている。

遣水の清らかさは文人趣味の景として重要であるため、護岸の草本類、水草類の整理には充分注意を払って管理している。

傍花閣の付近にはその名の通りシダレザクラをはじめ複数種のサクラが多く植栽されているが、気候変動による激しい暑さや地中水位の変化等からか樹勢を弱めており、近年は育成状態を著しく悪化させているため、適宜盛り土やエアレーションなどによる対策を施している。

(6) 園林堂、蓮池

園林堂は版画家・棟方志巧 (1903-1975) の作による 44 面の襖絵で有名だが、傍らにある蓮池も季節ごとに移ろう一幅の襖絵のようにハスの花、葉、実の量を調整し景色を管理している。背景のサザンカ (*Camellia sasanqua*) の花が咲く冬時期も、水面にハスの枯れ茎等をわずかに残し、侘びた風情をとどめるようにしている。

(7) 回棹廊

回棹廊を渡るには園林堂の山門としての傍花閣から山に分け入ってゆく北側のコースと、北大島から斜面をたどる南側からのコースが考えられるが、どちらを選ぶにせよ「忽然と」回棹廊が現れるのが望ましいと考えている。溪谷の奥地への旅路の最中に屋根付き橋に出会う風情である。涉成園では印月池や臨池亭の池の場合もそうだが、初見の来客に対して興のあるサプライズの演出が可能であるように景物が配置されている。この回棹廊との「遭遇」の体験も見事な作庭上の構成であると考えている。ビャクシンの岸辺から東に橋を見通す視点場はあるのだが、護岸のクロガネモチ (*Ilex rotunda*) やイロハモミジ (*Acer palmatum*) 群の横枝や下枝に遮蔽性を担わせ、「遭遇」体験より以前に全貌が眺め渡せるようなしらけた景色にしないよう注意深く管理している。

(8) 丹楓溪、獅子吼

本来イロハモミジは低山の谷あい自生する樹木である。丹楓溪では高木の樹下で被圧されたモミジが獅子吼の流れや印月池に

枝を水平に差し伸べている。頼山陽『涉成園十三景詠』(文政10年・1827)にも「丹楓夾欄斑 泛得碎錦片」と記される。このモミジの枝々が織りなす水鏡の景を維持するため、柔らかくて自然な枝ぶりを大切に管理している。

煎茶趣味において「清らかな流れ」はその傍らで茶を煮る場所として重要な意味を持つ¹³⁾。また「獅子吼」とは、宗祖親鸞聖人の教行信証にも「説法獅子吼」と記されるように、大切な仏教用語である。印月池の水源として獅子吼からとうとうと豊かな水があふれ出て園内隅々に行き渡る様子は、阿弥陀仏から教えがこの我々の住む世界にあふれ出て響き渡るかのようにも感じられる。仏法が庭園内に満ちている様子と、煎茶趣味のコンセプトが重ね合わせて感じられる場所として、獅子吼エリアを大切に管理している。



図-3 「庭だより」2021年春号(発行: 植彌加藤造園株式会社)



写真-3 管理方針説明看板を園路沿いに設置 (2024年1月撮影)

5. おわりに

庭園は日々変化のただ中にある。その管理に携わる者には常に現状に対する問いかけと試行錯誤が求められている。涉成園という庭園には真宗の教えがその根本にあり、宣如上人の作庭時から、頼山陽の『涉成園記』、先人の庭職人達の仕事、至る処にまで響いている。この「法をつなぐ」という使命をその都度確かめることが、庭園の育成管理の指針となると考えている。

庭園の本来持っている価値、特性、魅力を伝える取り組みとして季刊発行のチラシ「庭だより」(図-3)や令和5年(2023)よりQRコードを用いた英語表記付の案内看板(写真-3)も設置している。これらにて上記の管理方針の内容の一部を来園者に説明している。

令和9年(2027)には頼山陽の『涉成園記』200周年を迎える。山陽は『涉成園記』の結びにおいて、未来への希望を記した。

—— 淵明之園日涉而成趣。此園則歳涉而成趣又世涉而成趣。自今之後法脉相承與太平之業同歴劫弗墜其趣之成更如何哉。山皆生七宝之樹池皆湧金色蓮華未可知也。裏姑記見在之趣以俟後世大手筆有再記之者。——¹⁴⁾とあり、後世への想いを感慨深く記すと共に、未来の「涉成園十三景」の趣に想いを馳せている。

「日に涉り」「世に涉り」涉成園の価値が時代を越え国境を越えて永く広く伝えられるよう、「保存」と「活用」の継承と進化に尽力したいと考えている。

謝辞: 真宗大谷派(東本願寺)様には、日頃より育成管理方針において熱心なご教示と深いご理解をいただき、心より御礼を申し上げます。

引用文献

- 1) 加藤友規 (2023): 「日本庭園のフォスタリング・マネジメント・人材育成」『ランドスケープ研究 Vol. 87 (2)』日本造園学会, 138-139
- 2) 加藤友規 (2013): 涉成園の空間的特質に関する研究。京都造形芸術大学大学院博士論文, 25-33
- 3) 前掲2
- 4) 加藤末男 (2014): 名勝涉成園保存管理計画書: 京都造形芸術大学大学院修士研究活動実施報告書
- 5) 尼崎博正 (2003): 「涉成園の成立過程と水系の変遷」、『庭園学講座 X. 文化財庭園の保存管理技術』京都造形芸術大学日本庭園研究センター
- 6) 真宗大谷派宗務所(東本願寺)本願部参拝接待所 (2011): 名勝涉成園(枳殻邸), 1
- 7) 前掲2
- 8) 前掲6
- 9) 後藤香奈・和田貴子・太田陽介・阪上富男・加藤友規 (2023): 名勝涉成園における京都府総合前種「ミズアオイ」確認の経緯と生息域外保全: ランドスケープ技術報告集 Vol. 2
- 10) 前掲9
- 11) 加藤寿寿雄・加藤大貴・加藤友規・加藤嘉基・寺内桂子 (1999): より美しく涉成園: 植彌加藤造園株式会社報告書
- 12) 前掲6
- 13) 尼崎博正・麓和善・矢ヶ崎善太郎 (2018): 「煎茶の場の環境」、『庭と建築の煎茶文化』: 思文閣出版, 37pp
- 14) 『涉成園記』「習字本大成附録第三号」(1933): 『和漢名家習字本大成第六巻』所収の山陽自筆の影印本を参照

名称: 涉成園 (枳殻邸)

所在地: 京都市下京区下珠数屋町通間之町東入東玉水町 300 番地

発注: 真宗大谷派(東本願寺)

育成管理: 植彌加藤造園株式会社

規模: 約 35,200 m² (約 10,600 坪)

期間: 昭和 47 年 (1972) より年間管理